

ユーロとパリティー

0.9855, 0.9820 二種類の通貨の直近の為替レートだ。普通は為替レートを見ただけでどの通貨の為替レートかわかるものだが、これはそうはいかない。ほとんど同じだからだ。前者がユーロスイス、後者がドルスイスだ。

これはユーロドルがパリティー(1.0)に近付いたためだ。直近では1.0038と1台をキープしているが、昨日は一時的に1.0を割れる局面もあった。パリティーとか最高値・最安値の更新など節目のレートに近付くとディーラーは意識的にそのレートを付けに行く。珍しいことではない。あれは俺が付けたレートだといつまで経っても自慢するディーラーもいる。ちなみにユーロスイスのパリティー割れは7月の上旬だった。以後1.0を下回る水準が続いている。

前回のユーロドルのパリティー割れはもう20年以上前になる。単一通貨ユーロが誕生して間もない時だ。誕生後ユーロの上昇を見込んでドイツマルクのポジションを買う者が多すぎたためだ。誕生後すでにユーロのポジションはロングに傾き過ぎていた。ユーロドルは99年に1.17でスタートしたが、パリティーを割り込み、00年には0.82台まで下落した。

GDPや人口でも米国に遜色ない規模を持つユーロ圏をバックにドルに匹敵する国際通貨への成長が期待されたユーロが、誕生後間もなく下落傾向になりパリティー割れになるとは市場でも意外に受け止められた。だが今回のユーロドルのパリティー接近にはそうした意外感はない。

金融政策はFEDもECBも量的緩和を転換し、利上げ局面にある。ただFEDの方が利上げのサイクルは早く、今月0.75%、9月0.5%の利上げが見込まれている。9月は0.75%の可能性も1週間前に比べれば増えてきた。

一方ECBの利上げも確実だが、FEDほどの幅ではない可能性が高い。ECBはインフレ抑制と同時にロシアのウクライナ侵攻がもたらす欧州への経済的影響にも配慮しなければならないからだ。

インフレ抑制のための中央銀行の引き締め策による景気後退懸念については米国よりも欧州の方が早まるとの見方が多くなってきた。ユーロ圏最大の経済大国ドイツではエネルギー危機が産業だけでなく、社会、家庭にまで及んできた。熱湯の制限、街頭の照度の低下などだ。投資マインドも悪化してきた。2011年の欧州債務危機以来の低水準だ。

こうなると金利面でも景気面でもドルはユーロに対して買われる局面が多くなる。ユーロドルの展開を示唆する最もシンプルな事実、米国はエネルギーを輸出しており、欧州はエネルギーを輸入している、ことだ。

そのうち0.9655, 0.9820ぐらいになればどちらがユーロスイスか迷うこともないだろう